

【研究ノート】

原子の詩

——引用でたどるルクレティウス影響史——

中 金 聡

目 次

はじめに

- 1 自然は自由である
- 2 宗教はかくもはなはだしき悪事を……
- 3 毒杯の縁に塗られた蜂蜜
- 4 燃えあがる世界の壁
むすびにかえて

はじめに

紀元前1世紀の共和政末期ローマに生きた詩人ルクレティウス（Titus Lucretius Carus, c.96-c.55BC）は、ギリシアの哲学者エピクロスの著作に感銘を受け、その哲学を同胞ローマ人たちに解説する長篇詩『事物の本性について』（*De rerum natura*）を書いた。オウィディウスはその偉業を「崇高なルクレティウスの詩行が減びるのは/世界の終わりのまさにその日であろう」（『恋の歌』[I.15.23-24]）と評し、ウェルギリウスは「幸いなるかな、事物の原因を認識し/あらゆる恐怖と無常な運命と、飽くことを知らぬ/アケロン川のざわめきを踏みにじったひとは」（『農耕詩』[II.490-492]）と頌詞を捧げ、競ってそれを模倣した。エピクロスの著作の大半が散逸してしまったのち、その哲学の精髓を伝える『事物の本性について』は学問詩（didactic poem）の嚆矢にして頂点とみなされるようになる⁽¹⁾。2000年を経てもなお詩人たちはルクレ

原子の詩（中金）

ティウスのラテン語と格闘し、その翻訳や模倣に取り組みつづけ⁽²⁾、多少のアレンジを加えても「引き裂かれた / 詩人の手足 (disiecti membra poetae) は残るだろう」というホラティウスのことばの正しさを証明している（『諷刺詩』[I.4.62]）。

『事物の本性について』の一節をエピグラフに掲げてルクレティウスへのオマージュとした書物は、ジャンルの垣根を超えて無数にある。トマス・ハーディは長篇小説『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*, 1876) のために「人生の舞台裏に隠れた秘密 (vitae post-scaenia celant)」[IV.1186] という詩句を選んだ⁽³⁾。レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』(*Tristes Tropiques*, 1955) が「だから、おまえに先立つ者も、おまえと同じように滅び去っていったし、これからも滅び去るだろう (Nec minus ergo ante haec quam tu cecidere, cadentque)」[III.969] をエピグラフに掲げていることはよく知られている⁽⁴⁾。J・L・モンティスの『環境物理学の諸原理』(*Principles of Environmental Physics*, 1973) は、全 12 章のすべてに英訳『事物の本性について』からとったエピグラフが付いている⁽⁵⁾。架空の惑星の一年を記述した SF 作家ブライアン・オルディスの『ヘリコニア』(*Helliconia*, 1982-85) 三部作は、各部の冒頭と末尾が『事物の本性について』第 5 巻からのかなり長い引用で飾られている⁽⁶⁾。リチャード・パワーズの近作『惑う星』(*Bewilderment*, 2021) の場合は、「それゆえ同様の理由で、わたしたちはみとめざるをえない——地球、太陽、月、海、その他あらゆるものはひとつかぎりの存在ではなく、無数に存在するのだということ⁽⁷⁾」である。

『事物の本性について』でもっともよく知られた詩行といえば、「愉しや、嵐の海に……」の日本語訳で親しまれている第二巻冒頭部分であろう。

大海原で嵐が波をかき立てているとき、陸のうえから他人の苦労を眺めるのは嬉しい。他人の困難が心地よく嬉しいのではなく、自分はこの不幸に見舞われていないと自覚するから嬉しいのである。平原に広がる戦争の大合戦のもようを、自分ではその危険にさらされずにみるのも嬉しい。とはいえ、な

により愉しいのは、賢者の学問で築き固められた平穩な殿堂にこもって、高所から人びとを見おろし、かれらが人生の途をもとめてさまよい、あちらこちらと踏み迷っているのを眺めていられること、才能や生まれのよさを競いあい、日夜はなはだしい辛苦を尽くして権力の高みに昇りつめ、あるいは富のかぎりを手に入れようとあくせくするさまを眺めていられることである [II.1-13]。

思想史家ハンス・ブルーメンベルクは、高尚な哲学の快樂を安全な岸から海難船を眺めることに喩えたこの文章の明示・暗黙の引用例を拾いあげるとヨーロッパにおける哲学観の変遷史となることをきわめて説得的に示した⁽⁸⁾。小論はそれに大いに刺激されたとはいえ似て非なる試みであり、ブルーメンベルクの向こうを張る気など毛頭ない。すなわち、『事物の本性について』の引用例を数珠繋ぎにただけでも、エピクロスの哲学がルクレティウスを経て受容され、後世に影響をおよぼす過程の大まかな見取り図ができるのではないかと考えたのである。以下では、いずれ劣らず引用頻度の高い4つの詩行を取りあげ、後世の文人たちがそれをどのように理解し、いかなる思想史的文脈において、なにを正当化したり否定したりするために引用したかを概観する。引用例はたまたま筆者の眼にとまったものにかぎられており、けっして網羅的ではないことをはじめにお断りしておく。

1 自然は自由である

ルクレティウスを信じるなら、エピクロスは自然についてこう語った。宇宙は無限に広がる空虚とそのなかを運動する無限個の原子からなる。神々は存在するかもしれないが、この宇宙の創造者ではない。この宇宙に存在するすべてのものは、事物も人間を含む生命も、永遠不滅の原子がたまたま衝突し結合してできあがった。

原子の詩（中金）

これらのことをよく理解して信じるならば、たちどころにわかるであろう。自然は自由であり、傲慢なる主人に左右されることなく、それ自体で自由勝手な独立行動をとっていて神々とは関係がないということが。

Quae bene cognita si teneas, natura videtur/ libera continuo dominis privata superbis, ipsa sua per se sponte omnia dis agere experts [II.1090-92].

ルクレティウスにとってエピクロスの教えはこのラディカルな自然の哲学ゆえに「真の理論（vera ratio）」の名にあたいするのであり、『事物の本性について』もそれにならって「神を奪われた自然と世界を奪われた神⁽⁹⁾」を記述している。哲学者ジョージ・サントヤナは「事物そのものが詩をもつ」ことをあますところなく明らかにしたルクレティウスをダンテやゲーテと並んで「哲学的詩人」に数え、「この洞察の崇高さのまえでは、どんな形態の悲愴な錯誤も陳腐でわざとらしくみえる。幼稚な心にとって唯一可能な詩である神話も、これにくらべれば下手なレトリックにしか聞こえない⁽¹⁰⁾」と驚嘆した。作家オルダス・ハクスリーも「新科学が現代世界にもたらした新しい観念や驚嘆すべき事実」を引き受ける詩人こそが「もっとも偉大な哲学的かつ科学的詩人」であるといい、「20世紀はいまでもルクレティウスを待っている⁽¹¹⁾」と賛辞を惜しまない。

事物の自然^{ネイチャー} = 本性をいかなる超自然的なものも背後に想定せずに記述しようとするルクレティウスの自然主義は、キリスト教神学の優位のもとに抑圧されてきた人間の自然^{ヒューマン・ネイチャー}を解放しようとするルネサンスの最大の思想的動因となり、快楽を率直に肯定する傾向（ロレンツォ・ヴァッラ、エラスムス）や大胆な性愛表現（モリエール）を文芸にもたらす。とくに人為に汚される以前の無垢な人間を記述した『事物の本性について』第5巻は、非ヨーロッパ世界についての知見の蓄積と相俟って、人類の起源にかんする聖書の説明に飽き足らない多くの思想家たちを刺激した。1562年にルーアンの宮廷で新大陸から連れて来られた3人の食人種と対面したモンテーニュは、大柄な近衛兵が幼王シャルル9世にかしづいたり、貧者が富者に報復もせず不平等を忍従したりするさまが、かれらの眼には滑稽に映ったことを『エッセー』（*Essais*, 1580-88）に記し

ている⁽¹²⁾。モンテスキューが『ペルシャ人の手紙』(*Lettres persanes*, 1721)で説明する「トログロディット族」の生活や、ルソーの『人間不平等起源論』(*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 1755)における自然人の描写にもルクレティウスの影響が顕著にあらわれた⁽¹³⁾。神学的に無記な人間の行動から自然の権利を引きだすガッサンディ、ホップズ、ロックらの自然状態論は、このような近代におけるルクレティウス受容過程のもっとも重要な哲学的副産物である。

もちろんキリスト教神学はこれを黙過してはいなかった。ルクレティウス熱の流行に業を煮やしたポリニャック枢機卿は『反ルクレティウス』(*Anti-Lucretius*, 1747)を著し、エピクロス主義的快樂観を復興したガッサンディとそれを利己主義倫理学説に仕立てあげたホップズを名指しで非難した⁽¹⁴⁾。『アブデラ人物語』(*Geschichte der Abderiten*, 1776)で知られるドイツの作家ヴィーラントは、若き日に読んで感銘を受けたポリニャックにならってみずからも長編詩『事物の本性』(*Die Natur der Dinge*, 1752)を著し、「おお、汝ルクレティウスよ、フックの装置〔ロバート・フックの光学機器〕を使って観察していたら、汝の甘美なやりかたでもっと価値ある目的を、創造主そのものをつとめて賛美したであろうに⁽¹⁵⁾」と嘲った。

ルクレティウスのラディカルな自然哲学への真摯な哲学的関心は、ドルバックが偽名で出版した『自然の体系』(*Système de la Nature*, 1770)第二部の扉頁に「自然は自由である」の一節を掲げて以後、本格的に再燃する⁽¹⁶⁾。自然を因果必然性によって自己運動する物質として説明したこの無神論者の著作の影響は、たとえば「自然哲学期」の若きシェリングの戯詩「強情者ハインツのエピクロス主義信仰告白」(“Epikurisch Glaubensbekenntnis Heinz Widerporstens,” 1799)に確認できる。「物質こそが唯一^{マテリア}真なるもの/われわれすべての保護者にして導き手/万物の正しき父/あらゆる思惟のエレメント/すべての知のはじめにして終わり」[II.68-72]と高らかに宣言するこの詩は、物質から思考が誕生する次第をルクレティウスにしたがって事細かに説明するのである⁽¹⁷⁾。

原子の詩（中金）

この時期のイギリスでは、ワーズワス、コールリッジ、シェリー、バイロンらロマン主義の詩人にルクレティウスの影響がみとめられるほかにも⁽¹⁸⁾、自然哲学分野ではダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィンの著作が重要である。たとえば『ズーノミア』（*Zoonomia*, 1794）では、生命の物質的起源がつぎのように説明されている。「生命なき粒子あるいは物質の原子は、さまざまな引力を有する種類のものもあれば、それを受けとめるさまざまな習性を有する種類のものもあって、それら生命なき物質のエーテル的特性とも名づけるものでまとまり、さまざまな形態の結晶になる。同じように生命ある微小繊維あるいは分子にも、取り込もうとする欲望や取り込まれやすい性向があり、このエーテル的特性と呼びうるもののために、たがいに近接すると合体して有機的物体を形成する⁽¹⁹⁾」。微粒子の「燃えあがる混沌」であった原初の宇宙にはじまり、人間社会が成立するまでを叙述した哲学詩『自然の殿堂』（*The Temple of Nature*, 1803）も明らかに『事物の本性について』の構成を模しているが、ルクレティウスの影響という点では、補注で詳述される「自発的生命力（spontaneous vitality）」の理論が注目される⁽²⁰⁾。

機械論的自然哲学には、自然の必然的な運動に最初の衝撃をあたえる「第一起動者」（アリストテレス）を仮定して創造説との両立をはかる余地が残っていた。しかしエピクロス主義的な原子論は、原子がそれ自体の自発的運動性により気ままに軌道を変えると想定することにより、まさしくこの「第一起動者」を無用のものとする真正無神論的な唯物論に道を開く。ルクレティウスによれば、原子が「まったく不定の時に不定の場所で（incerto tempore, incertisque locis）、進路をごくわずかに、運動に変化をきたすといえる程度に逸れる（declinare）」のでなければ、原子は「雨滴（imbris gutta）」のように空虚のなかをいつまでも垂直に並行落下しつづけ、軌道が相互に交錯して衝突・結合することもなく、われわれがいま見るような物体はもちろん、生命も、ひいてはこの世界も、形成されることはありえない [II.218-222]。この原子の「逸れ（clinamen）」が現代思想にとって汲めども尽きぬ着想源となっていることは周知のとおりである。『創造的進化』（*L'evolution créatrice*, 1907）の

エラン・ヴィタル
 「生の弾み」論で独自の哲学的進化説を展開したアンリ・ベルクソンも、若き日に『事物の本性について』を耽読したひとりであった。『ルクレティウスの拔萃』(*Extraits de Lucrèce*, 1884)にはこう記されている。

今日われわれが感嘆し、生物と呼ぶ驚くべき結合は、相当の長い時間を待ちさえすればかならずや生みだされるはずであった。たしかに生みだされたのだ。他の結合は生きて自分を維持できなかつたために消失したのであるから、われわれは唯一最上の完全な結合を眼にしており、その自然の秩序を、自然のいわゆる叡智を賞讃する。ただ偶然が、それらを他の無数の結合を生み出したと同じように生み出したのである⁽²¹⁾。

だがダーウィンもベルクソンも、そして現代の多くのルクレティウス擁護者たちも、偶然から世界を生成させる原子の「逸れ」のメカニズムを解明するにはいたらず、古色蒼然たる物活論や神秘的な生氣論に陥っている。いまはそれに想を得て存在の神秘を謳った現代詩二篇から引用するにとどめよう。

存在は生真面目に、悲しげに、流れ去り
 深淵の真空を空虚で満たす。……
 死のあまねき奔流は
 虚無となるばかり——それに抗うのは、
 それ自体の奇妙な抵抗力だけだ。
 ただの逸れではなく、逆流が (Not just a swerving, but a throwing back)
 神聖な後悔を抱いているかのように⁽²²⁾。

ルクレティウスはそれを知っていた、……
 ときにふたつの雪片が出会い、ひとつになる、
 またはひとつがしとやかに逸れていく (se détourne, gracieusement),
 みずからのわずかな死のなかへと⁽²³⁾。

2 宗教はかくもはなはだしき悪事を……

ルクレティウスはエピクロスを宗教の軛くびきから全人類を解放する「可死の神 (deus mortalis)」と崇め、こう讃えた。

天空のいたるところに顔をのぞかせ、恐ろしい形相で人類をうえから威おどしつける重苦しい宗教に圧迫され、人間の生活が地上を這いずりまわり、誰の目にも見苦しく映っていたそのときに、はじめてギリシア人の死すべき一介の人間が目をあげ、不敵にもこれに反抗した。かれこそはこれに逆らって立ちあがった最初のひとである。神々のことを語る神話も、電光も、雷鳴で脅す天空も、このひを抑えつけることはできず、かえってその精神の烈々たる気迫をますますかきたてた結果、人間としてはじめて自然の扉の堅い門を破りのぞくことを望ませるにいたった。

Humana ante oculos foede cum vita iaceret/ in terris oppressa gravi sub religione,
quae caput a caeli regionibus ostendebat/ horribili super aspectu mortalibus instans,
primum Graius homo mortalis tollere contra/ est oculos ausus primusque obsistere contra;
quem neque fama deum nec fulmina nec minitanti/ murmure compressit caelum, sed eo
magis acrem/ inritat animi virtutem, effringere ut arta/ naturae primus portarum claustra
cupiret [I.62-71].

さらにルクレティウスは、トロイアに向かう艦隊の出帆をまえにアガメムノンが娘イピゲネイアをアルテミス神の祭壇で犠牲に捧げた故事を取りあげて、「宗教はかくもはなはだしき悪事を為さしめえた (tantum religio potuit suadere malorum)」[I.101]とさえいう。紀元前のエピクロスとルクレティウスがキリスト教を知っていたはずはなく、“religio”とはもっぱらギリシアとローマの宗教を指して「迷信」と揶揄したものなのだろう。しかしニーチェは「エピクロスがな^にを相手に戦いを仕掛けていたかを知るには、ルクレティウスを読めばいい。エピクロスが戦った相手は異教ではなく、〈キリスト教〉である。い

うなれば、罪とか罰とか不死とかいった概念による魂の腐敗である⁽²⁴⁾」と主張している。人びとの魂を死と死後についての迷信の虜囚とすることによって現世の支配を確たるものとするのが“religio”の本質ならば、「エピクロスが企てたような〈古い信仰〉にたいする闘争は、厳密な意味では、先住したキリスト教にたいする闘争であった⁽²⁵⁾」と。この宗教批判が世に受け入れられるまでにかかなりの紆余曲折を経たのは無理からぬことであった。

たとえばモンテーニュは、『エッセー』の第2巻第12章「レーモン・スポンの弁護」で古今の人身御供の事例を列挙し、そのなかにとりまぎれるようにルクレティウスの「宗教はかくも……」を引用しているが⁽²⁶⁾、これは『エッセー』公表後に加筆された多くの箇所のひとつで、没後に刊行された「ボルドー本」(今日のわれわれが読む『エッセー』)でしか読むことができない。ユグノー戦争渦中の宗教的雰囲気がかきわめて濃厚な16世紀当時のフランスの状況下では、異教徒の無神論思想へのシンパシーをあからさまにすれば異端視・迫害・社会的追放は必至であった。つまりこれは慎重なモンテーニュが「防御的著述⁽²⁷⁾」の技法を駆使した一例なのである。

ベーコンは『エッセイズ』の第2版(*Essays*, 1612)で増補した「宗教について」のなかで、キリスト教徒は宗教を守るために戦争や迫害のような暴力的手段を用いる異教徒のような真似をしてはならないとってルクレティウスの一節を引用し、「もしかれがフランスにおける大虐殺だのイギリスの火薬陰謀だのを知ったなら、なんといったらうか。かれは実際より7倍もエピクロス主義者になり無神論者になったらう⁽²⁸⁾」と述べている。これもよく考えればキリスト教を他宗教と無区別にあつかっており、かなり危ない橋を渡っているといえる。ホッブズが『ビヒモス』(*Behemoth*, 1679)の海賊版の表紙にルクレティウスの一節が勝手に掲げられてしまったことへの困惑を手紙でオーブリーにもらしているのも、おそらく同趣旨であろう⁽²⁹⁾。

ホッブズやスピノザは、偶運フォーチュンのような現象を根拠に神の存在を信じる宗教的迷信を原因にかんする人間の無知に帰した。ヴィーコは『新しい学』(*Principi di scienza nuova*, 1725)で「もろもろの虚偽の宗教は詐欺からではなく軽信か

ら生まれた」と主張し、ルクレティウスの批判する迷信ですら文明化への必要な段階である「詩的神学 (theologia poetica)」の一表現とみなしたが⁽³⁰⁾、これは 18 世紀の啓蒙の時代にあって少数意見に属している。ヴォルテールは架空書簡体の短篇「キケロ宛のメンミウスの手紙」(“Lettres de Memmius à Cicéron,” 1771) で件の詩句を「この世がつづくかぎり永続する⁽³¹⁾」と大胆に讃えるのみならず、自作でもルクレティウスの哲学的自然主義を積極的に摂取し(「もう一度だけ言っておきますが、自然は自然にしか似ていないのですよ。どうして自然をなにかにたとえようとするのですか」)、無神論にも寛容であった(「せめてかれらがエピクロスやレオンチウム、ルクレティウスやメンミウス、あのオランダでいちばん正しいひとのひとりであったといわれるスピノザ、不幸な君主チャールズ 1 世にたいしてあんなにも忠実であったホブズなどのように、正しい無神論者であつたらよかつたのですがね!⁽³²⁾」)。

フローベールはルイ・ブイエに宛てた 1850 年 8 月 20 日の手紙に「宗教はかくもはなはだしき、云々 (Tanta religio! etc.)」と省略して引用しているが⁽³³⁾、啓蒙の精神を鼓舞したルクレティウスには根本的な疑念を抱いていたようである。ロジェ・デ・ジュネッテ夫人への 1861 年の手紙にはこう記されている。

……古代人にとってこの黒い穴 [死] は無限そのものでした。かれらの夢は、不朽の黒壇を背景に描きだされ流れ去っていくのです。神々はすでになく、キリストがいまだ存在しなかったキケロからマルクス・アウレリウスまでのあいだは、人間が独力で立っていた唯一の期間なのです。わたしはこれほどの偉大さをほかに見いだすことができません。でもルクレティウスでがまんならないのは、その自然科学をいかにも絶対的であるかのように提示することです。かれに弱点があるとすれば、十分に疑うことをしなかつたからです。説明すること、結論づけることだけを望んだのです⁽³⁴⁾。

『事物の本性について』は読む者すべてに蒙昧からの覚醒を迫り、宗教か哲学かの過酷な二者択一のまえに立たせる。だが哲学にそもそも宗教の代わりが

つとまるのだろうか、わけても死とは物体が解体して元のばらばらな原子に戻るだけのことだと教える科学的唯物論の哲学に？ もちろん宗教はいまやこの世の道德の唯一の源泉でも真の救済を約束するものでもないが、だからといって「わずかのあいだわたしはとどまる / まだちりぢりにならずに (for a breath I tarry/ Nor yet disperse apart)。……風の吹きめぐる四方八方へ / 果てしない道へわたしが旅立つまえに (Ere to the wind's twelve quarters/ I take my endless way) ⁽³⁵⁾」という死生観にしたがって従容と「黒い穴」に飛び込むことが万人にできるわけではない。フィリップ・ラーキンの「朝の歌」(“Aubade,” 1977)の一節にもあるように、

……かつては宗教が
 あの虫の喰った響きのよい人造錦で
 人は死なないと信じ込ませようとした。
 また見かけ倒しのたわごと曰く、「理性あるものは
 自分が感覚しないものを恐れはしない」。わかってない。
 われわれが恐れるのはこれ——なにも見えず、音もなく
 触覚も味覚も嗅覚もなく、考えるべきこともなく
 愛したり寄り添えるものもない
 だれも目を覚まさなくなる麻酔薬⁽³⁶⁾。

宗教を至高の玉座から引きずりおろした科学的啓蒙の精神は、その空位を占めるべきものを見いだしたのだろうか？ フローベールのルクレティウス批判は、近代思想につきまとう根本的な疑問の先鋭なあらわれでもあった。

3 毒杯の縁に塗られた蜂蜜

ところでエピクロスは自分の教えを実に素気ない散文で記したが、それを解説するにあたってルクレティウスはエンペドクレスの哲学詩をモデルとした

原子の詩（中金）

ヘクサメトロス

六脚律の詩型を採用した。その理由はつぎのように説明されている。

医者子どもに嫌なニガヨモギを服用させるのに、まえもって杯の縁に甘い黄色の蜜を塗り、知恵のない年ごろの子どもが唇のようにだまされて、ニガヨモギの苦い汁を飲み干すようにしむける。だからといって、これは欺かれても裏切られたことにはならず、かえって健康を回復し、元気になるのである。sed vel uti pueris absinthia taetra medentes/ cum dare conantur, prius oras pocula circum contingunt mellis dulci flavoque liquore/ ut puerorum aetas improvida ludificetur/ laborum tenus, interea perpotet amarum/ absinthi laticem deceptaque non capiatur/ sed potius tali facto recreata valescat [I.936-942; cf. IV.11-17].

ルクレティウス以後、「毒杯の縁に塗られた甘い蜜」は哲学と詩のあるべき関係を示唆するメタファーとしてさまざまに利用された。1世紀の修辞学者クインティリアヌスは、青年を退屈な学習に引きつけておくには多少の楽しみが必要だという意味に解している（『弁論家の教育』[III.1.3-4]）。ピコ・デッラ・ミランドラはバルバーロ宛の1485年6月の手紙にこのメタファーを引き、哲学の内容よりもその修辞形式を重視するのは、議論するソクラテスに着衣の乱れを注意するようなものと批判した。ルクレティウスは愚かな精神（エピクロスの哲学のこと）を美しく歌いあげたが、真実を語る哲学を装飾してこそその詩ではないか、というのである⁽³⁷⁾。リプシウスは『政治論』（*Politicorum*, 1589）において、ルクレティウスを引き合いに出しながら統治者が国家の利益のためにつく嘘は許されると主張している⁽³⁸⁾。

ルクレティウス自身は、『事物の本性について』の名宛人であるメンミウスのような非哲学的人間に難解な哲学を教えるには詩がもっとも適切な表現手段であると考えていた。

この理論は慣れていない一般の人びとにとってはむずかしすぎるかもしれないし、世人はこれに尻込みする。そこでわたしは、ことば甘き詩神^{ビエリス}の歌によ

ってわれらがこの理論を君に説きあかしたいと思った。そして事物の本質がすべていかなる姿をとっているかを君が了解してくれるまで、この説きかたを用い、いわば詩という甘い蜜の味を効かせて君の心をわが詩につなぎとめておければ、と考えたのである。

sic ego nunc, quoniam haec ratio plerumque videtur/ tristior esse quibus non est tractata,
retroque

volgus abhorret ab hac, volui tibi suaviloquenti/ carmine Pierio rationem exponere nostram
et quasi musaeo dulci contingere melle/ si tibi forte animum tali ratione tenere

versibus in nostris possem, dum perspicis omnem/ naturam rerum, qua constet compta
figura [I.943-950; IV.11-25].

魂を正しいありかたへと教導するために用いる策術はそれ自体で正しいという主張は、たとえばプラトンにもみられる。子どもの魂を正しい法律に従うよう教育するのに快いムーサの技術を用いるのは、病気の子どもに滋養のあるものを美味な食物に混ぜてあたえ、正しい食習慣を身につけさせるのと同じだというのである(『法律』[659E-660A])。しかし哲学的真理が難解なばかりでなく、詩の甘さでごまかさねば飲み下せないほど「苦い」という考えはルクレティウスに独自のものである。

この思想のみごとな応用例はモンテーニュの『エッセー』第3巻第4章「気分転換について」にみられる。一般に苦悩を癒すには「気分転換 (diversion) の方法」が有効だが、死の恐怖に対処するにはそれよりはるかに「強く激しい理論 (fortes et vives raisons)」が必要である。だがそれは「あまりにも高く、あまりにもむずかしすぎる」がゆえに用法を誤ると逆効果になるから、どんな患者にでも処方できるというものではない⁽³⁹⁾。モンテーニュがいたいことは、『エッセー』の別の箇所でも引用されるキケロ『神々の本性について』のつぎの一節 [III .69] が代弁している。

葡萄酒は病人にとってめったに役に立たず、害となることがしばしばあるの

で、曖昧な快癒の希望から明らかな病状の悪化を招くより、葡萄酒はいっさいあたえないほうがよい。同様に、わたしたちが理性（ratio）と呼ぶもの、思考の素早い動きや鋭さや正しい導きかたといったものは、ごく少数の者には有益であるが、多くの者には害となるだけである。それゆえ、これほど大量に惜しみなく人びとに分けあたえられるよりも、まったくあたえられないほうがよかったのではないかと思えるほどなのだ⁽⁴⁰⁾。

マルキ・ド・サドが一般公衆向けに書いた唯一の作品『アリーヌとヴァルクール』（*Aline et Valcour*, 1795）は、ルクレティウスから引いた「ニガヨモギ」の詩行をエピグラフにしている。書簡体の感傷小説という18世紀当時の流行の体裁が読者の興味をつなぎとめる「甘い蜜」であることは、サド自身が作中人物の口を借りて「幻想は不幸につきものです。健康によい苦い薬が入った杯の縁に甘い蜂蜜を塗って、子どもに差し出すように、子どもは騙されるのですが、錯覚は甘いものです（*l'illusion est à l'infortune, comme le miel dont on frotte les bords du vase rempli de l'absinthe salutaire présentée à l'enfant, on le trompe, mais l'erreur est douce*）⁽⁴¹⁾」と述べるところからも明らかだろう。その甘さでごまかしてサドが読者に飲み込ませようとする「苦い薬」は、物語のほぼ中央に位置する第35の手紙、すなわち野蛮な食人国のビュティアと哲人王の統治する高雅な徳の国タモエの記述に仕込まれている。「人間は墮落した習俗や悪辣な心的傾向に身を委ねて、悪をなすのだ。しかし、人間のなす悪はその人間が生きている風土にかかわっているだけで、全体的な秩序からそれを判断すれば、その人間は全体的な秩序の法則を実行しているにすぎない⁽⁴²⁾」。だから自分で抑えきれない衝動に負けただけの人間を死刑にする法律はおぞましきの最たるものである、と。

いかに優しくしても自由でない人間、悪を犯さないではいられなくなったから悪を犯した人間を矯正すべきではないのです。われわれの行動はすべて最初の衝動の必然的な結果であるとするならば、そのすべてがわれわれの器官

の構造、体液の流れ、動物精気の多少の活動、呼吸する空気、接種する食物によるとするならば、そのすべてが肉体と結びついているとするならば、われわれに選択の可能性もないならば、もっとも穏やかな法律そのものも強圧的なものになってしまうのではないのでしょうか⁽⁴³⁾。

サドの哲学を非常識と難じることはできない。哲学者が「法に自然を、慣習に理性を、世論に自分の良心を、世論に自分の良心を対立させる人間 (un homme qui oppose la Nature à la Loi, la raison à l'usage, sa conscience à l'opinion, & son jugement à l'erreur)」であるのなら (ジャンフォール『箴言と思索』1)、これは実に標準的な哲学者の見解とすらいえるからである。ではルクレティウスの場合、詩という「甘い蜜」で唇を騙さねばならないほど「苦い」薬、しかしそれを服用しなければ魂が真の健康を回復することもありえない常識はずれなエピクロスの教えとはなにを指すのであろうか。

4 燃えあがる世界の壁

『事物の本性について』全巻にわたってくりかえし用いられる詩的メタファーのひとつに「燃えあがる世界の壁 (flammantia moenia mundi)」がある。

こうして、かれの精神の活発な力はなにもものといえども征服せざるものなく、燃えあがる世界の壁を超えて遠く前進し、想像と思索によってあらゆる無限の全宇宙を踏破した。

ergo vivida vis animi pervicit et extra/ processit longe flammantia moenia mundi
atque omne immensum peragravit mente animoque [I.72-74; cf. II.1044-1047; III.14-30].

エピクロスの伝存するテキストにこの表現はないが、「ピュトクレス宛の手紙」に「世界は星々と大地とすべての現象を包含しつつ、^{コスモス}天のある限界づけられた部分をなしており、それが解体すると内部はすべて混沌としてしまう。

原子の詩（中金）

つまり世界は無限なものから切りとられた部分であり、ある限界でおわる」[DL.X.88]と述べられているものがこれと関連すると考えられてきた。ルクレティウスはその姿をかなり具体的に描写している。「世界の壁」は大地をつくる原子よりもずっと小さく滑らかな原子でできており、それが大地の隙間からアイテールとともに噴きだして炎の壁のようにみえるというのである。

そのさまは、いまでもたびたびみるように、燃える太陽の金色の朝の光が露にきらめく草の葉を赤く染めるとき、湖や絶えることのない川の流れが霧を吐き、またときには大地そのものさえ蒸気を吐くのとほとんどかわりない。空へと立ちのぼりあつまったものはすべて濃くなり、雲となって空を覆う。このようにしてそのとき、軽くひろがりやすいアイテールはその密度を増していたところを取り巻き、そしてなお遠くあらゆる方向にひろがって、他のものをひとつ残らずあくなき抱擁に抱きしめる。

ideo per rara foramina terrae/ partibus erumpens primus se sustulit aether
ignifer et multos secum levis abstulit ignis/ non alia longe ratione ac saepe videmus,
aurea cum primum gemmantis rore per herbas/ matutina rubent radiati lumina solis
exhalantque lacus nebulam fluviique perennes/ ipsaque ut inter dum tellus fumare videtur;
omnia quae sursum cum conciliantur, in alto/ corpore concreto subtexunt nubila caelum.
sic igitur tum se levis ac diffusilis aether/ corpore concreto circum datus undique saepsit
et late diffusus in omnis undique partis/ omnia sic avido complexu cetera saepsit [V.457-470].

この荘厳さの詩的描写は後々まで多くの芸術家たちと思想家たちを虜にしていた⁽⁴⁴⁾。キリスト者たちは、われわれの経験的認識を超越した叡知的なものの存在を示唆するために「世界の壁」のメタファーを利用する。アウグスティヌスの『三位一体論』(*De Trinitate*)に救いをもとめるひとは「自己の弱さを知ることを世界の壁 (moenia mundi), 地の基, 天の頂を知ることよりもうえにおく⁽⁴⁵⁾」と記されているのは、そのもっとも早期の例であり、アウグスティヌスがエピクロス主義にかんする知識をルクレティウスから直接に得たと推

測される根拠となっている。ルネサンス期のよく知られた例はピコ・デッラ・ミランドラの「神への祈り」(Deprecatoria ad Deum)の一節である。

おお、恵みぶかき神よ、その莊嚴の高みにありていと畏く / 三位は一体にして
真にひとつの神なり / 燃えあがる世界の壁のかなたに (super excelsi flammantia
moenia mundi) ありて / 祝福されたあまたの天使の歌声にかしずかれ⁽⁴⁶⁾。

「燃えあがる世界の壁」のかなたに世界の創造主たる神をみる信仰者の情熱は、事実と科学が優勢になる近代においてこそかきたてられるのかもしれない。ニューマン卿が『大学の理念』(*The Idea of a University*, 1852)で「物理科学の目的は現象の複雑さを単純な元素と原則に解消することにある。だがそうした第一の元素、原則、法則にたどりついてしまうと、その使命はおわる。最初の物質の体系の内部にとどまりつづけ、「燃えあがる世界の壁」を超えて進もうとはけっしてしない⁽⁴⁷⁾」と主張したのはその典型である。『指輪物語』(*The Lord of the Rings*, 1954-55)などのファンタジー小説で知られるJ・R・R・トルキーンは、「妖精物語について」(“On Fairy-Stories,” 1938)でやはり「燃えあがる世界の壁」のかなたを遠望した。

妖精物語の慰めは幸福な結末の喜びだ。いや、もっと正確にいうと急転直下、運命の大逆転の喜びなのだ……。妖精物語はこのすばらしい喜びをとともうまく作りだす。喜びは逃避や逃亡とはまったく違うのである。これこそ妖精物語の異界に突然現れて二度と起こることのない、奇跡的な恩寵なのである。/ 幸福な大団円は、デイスカタストロフ〈悲劇の大詰め〉の存在、悲しみや過ちの存在を否定しない。というのは、そういう不幸があればこそ、解放の喜びが必要なことから。喜びは、世界の最終的敗北を(いくら証拠を見せられても)きっぱりと否定する。世界の壁のかなた (beyond the walls of the world) にある喜び、悲しみと同じほどに鋭い喜びを、わたしたちがかいま見られることこそ、神の福音でなくてなんであろうか⁽⁴⁸⁾。

ソーントン・ワイルダーの長編小説『八日目』(*The Eighth Day*, 1967)の末尾近く、無実の罪に問われた父親がアメリカ先住民の手を借りて逃亡したことを知った息子は、自分が神のデザインの一部であると気づくほど幸福なことはないという境地にいたり、こう自問する。「最近、かれはルクレティウスの『事物の本性について』を読んでいた。かれのほかに「燃えあがる世界の壁 (the flaming walls of the world)」を意識している者がここにいるだろうか?⁽⁴⁹⁾」人知を超えた神の計らいや摂理を信じる者にとって、「世界の壁」の荘厳さはその背後に永遠不動の秩序と真の正義を確証させる悦ばしきものである。

しかし「壁」を障壁や隔壁の意味にとれば、「世界の壁」というメタファーは人間の理性や知力の限界を強調する懐疑主義と親和的である。抵抗権理論で政治思想史に名を残す16世紀スコットランドの歴史家・人文主義者のジョージ・ブキャナンは、死後出版の長編学問詩『天球について』(*De Sphaera*)で「燃えあがる世界の壁 (fammantia moenia mundi) に瞠目するとき、かれはその創造者を知っているのかもしれない⁽⁵⁰⁾」と謳うことができた。ところがルクレティウスから遡ってエピクロス哲学についての知見が格段に深まる17世紀も後半になると、そのような神的ロゴスへの懐疑をあからさまにした学問詩が登場する。王政復古期にリベルタンの詩人として名を馳せたロチェスターの「理性と人間への風刺」(“*Satyr against Reason and Mankind*”)はその典型にして絶頂であった。

理性の希求力に影響され

われわれは物質的な感覚を超えて飛翔し、

神秘に飛び込むや、上空から

燃えあがる宇宙の限界 (The flaming limits of the Universe) に穴を穿つ。

天国と地獄を探し、そこにながはたらいていたかを突きとめ

世界に希望と恐怖の真の土台をあたえる⁽⁵¹⁾。

宇宙の果てとその先にあるものを見たときと豪語するこの傲慢な理性を、ロチェスターは「ダニに自分を無限の似姿と考えさせ/安らぎのないその短い一生を

/永遠や祝福されたものにたとえさせる/超自然的な才能」と唾棄する⁽⁵²⁾。“The flaming limits of the Universe”という表現はジョン・イーヴリンによるルクレティウス第一巻の英訳（1656年）によるものだが、ロチェスターはそれを誤訳と承知のうえで撞着語法として用い、ブキャナンの合理主義神学を批判したのである⁽⁵³⁾。

理性の懐疑主義は18世紀フランスに陸続とあらわれた無神論者たちにも受け継がれている。ドルバックは『自然の体系』第1部第1章「自然について」を「人間は自然の作品であり、自然のなかに存在し、自然の法則に服し、そこから脱することはできず、思考によってもそこから出ることはいできない。人間の精神は、眼にみえる世界の限界の向こう側に飛びだそうとしても無駄であり、つねにそこへもどらざるをえない⁽⁵⁴⁾」と書きだしている。「眼にみえる世界の限界の向こう側 (au-delà des bornes du monde visible)」という表現は、おそらくラ・メトリが『人間機械論』(*L'homme-machine*, 1747)の献辞で用いた「世界の限界内で (dans les bornes du monde)⁽⁵⁵⁾」を踏まえたものであろう。この「限界」の内側にとどまればこそ、自然もまたかれらの奉じる必然的な法則にしたがって運動する機械としてあらわれてくるのだからである。だが同じ無神論の唯物論者でも、『百科全書』の「エピクロス主義 (ÉPICURÉISME)」の項を執筆したディドロはエピクロス＝ルクレティウスの哲学についてより正確な知識をもっており、懐疑主義から一步踏みだした。ある手紙に「エピクロスの振り子がかれを世界の障壁 (barrières du monde) を超えて外へと運んでいくにつれ、かれの足はユピテルの王冠を踏みにじる⁽⁵⁶⁾」と記されているところからそれが推測できるが、惜しむらくは自然哲学の知が地上の権力をも揺るがす力を秘めていることを暗示するにとどまり、形而上学的に論究したようすは見られない。

エピクロスは「世界の壁」は越えられないと嘆く懐疑主義者ではなかったが、「世界の壁」の外側を見た、そこには神を含めてなにもなかったと嘯くニヒリストでもなかった。ソローは1856年4月26日の日記に「燃えあがる世界の壁を超えて遠く前進した」とエピクロスを称えたルクレティウスのことばを引き、これをプロメテウス神話に関係づけている⁽⁵⁷⁾。「世界の壁」とは、われわれが

いま生きてあるこの世界を保護する防壁であり、その向こう側にあるものをわれわれの精神がのぞき見することを妨げている遮蔽幕でもあって、ひとりエピクロスだけがそれを見て戻ってきたのだ。ならばそれはなにから保護し、なにを見せまいとしているのか？ 荘厳な壁の向こうには寂寥としてとてつもなく恐ろしい光景が広がっていたのである。現代の詩人たちはこう表現している。

Flammantia moenia mundi, とルクレティウスは記した

サクソン人のように韻を踏み——あのたくさんの M は威厳を意味する——
燃えあがる世界の壁、延々とつづく砦が存在を
非存在から守っている、と⁽⁵⁸⁾。

……彼女は想う、骨壺でも考えるように
燃えあがる世界の壁を、崩れ落ちた
世界の壁を、アルプスと滔々たる銀河と
吹きさらしの死者たちすべてを護っていた
火と燃える境界線を。歩哨小屋は
燃え殻となりはてた。国境守備兵たち、賢者たち、友人たちも
去ってしまった。彼女の旅は人目をしのぶ必要がない。
たったひとり、完璧な女は歩みわたっていく
空気の浅瀬を。……⁽⁵⁹⁾

「燃えあがる世界の壁」が蔽い隠しているもの、それが崩れ落ちたときに剥きだしになるもの——要するにそれは、整然と安定してみえるこの世界の無根拠性と暫定性である。われわれがいま見る世界は、無限の空虚のなかを音もなく落下する無数の原子の落下軌道に「逸れ」が生じること^{クリナメン}によって形成され、この裸形の真実を隠す「世界の壁」によりかろうじて、つまりわれわれがそれを堅固なものと信じているあいだけ維持されている⁽⁶⁰⁾。この偶然性が支配する宇宙の実相は人間の心に底なしの深淵をのぞき込むような恐怖をかき

たてるだろう。ウォルター・ペイターは『エピクロスの徒マリウス』(*Marius the Epicurean*, 1885) のなかで、「燃えあがる世界の壁 (*flammanitia moenia mundi* — the flaming rampart of the world) の背後になにかがあるか」を不問にすることが生の現在性を十全に享受するための条件であると述べている。「われわれ自身の印象はどうだ! ——われわれの頭上に広がる青い幕が、実は万象を蔽う幕だとしても、その澄明さと熱ときたら! (our own impressions! —— The brightness and heat of the blue veil over our heads, if it be indeed a veil over anything!)⁽⁶¹⁾」。ジョゼフ・コンラッドが『チャンス』(*Chance*, 1913) のある目立たない箇所、この世がなべて平穏無事であることを象徴する晴天好日を「無限の恐怖が壮麗な青の天幕で蔽われて (with the horror of the Infinite veiled by the splendid tent of blue)」と形容したのは、「世界の壁」の外を見まいとする印象主義者ペイターを皮肉ったものともとれる⁽⁶²⁾。

ロマン主義者ウォルター・スコットは「空想作品における超自然的なものについて」(“On the Supernatural in Fictitious Composition,” 1827) で、「燃えあがる世界の壁の外 (*extra moenia flammanitia mundi*)」には「グロテスクで幻想的なもの」しかありえず、「好ましく心地よい考え」はその内側でだけ可能であると主張している⁽⁶³⁾。まさしくこのぬるま湯のような心地よさをま[・]や[・]か[・]しとみなし、万人を無の恐怖に直面させるがゆえに、エピクロスの哲学は「ニガヨモギ」なのだ。ニーチェが『ツァラトゥストラ』(*Zarathustra*, 1883) において、「壁 (Wände)」もその向こう側にある形而上学的な「背後世界 (Hinterwelt)」も不完全なこの世界に苦悩するデカダンな生が作りだした幻想にすぎず、あるのはただ偶然事のたわむれ、不条理と無意味だけであり、「いまなおわれわれは、一步ごとにあの偶然 (Zufall) という巨人と闘っている」と言い放ったとき、かれはエピクロスの後塵を拝していたのであった⁽⁶⁴⁾。

むすびにかえて

最後に『事物の本性について』からもう一箇所だけ紹介しておきたい。

原子の詩（中金）

事物の本性は断じてわれわれのために神々によってつくられてはいない。自然はいかに多くの欠陥をそなえていることか。

nequaquam nobis divinitus esse paratam/ naturam rerum: tanta stat praedita culpa
[V.198-199].

C・S・ルイスによれば、これは自然哲学から神を追放するために宇宙の「インテリジェント・デザイン」説を否定する「無神論の最強の擁護論⁽⁶⁵⁾」である。非デザイン論法（Argument from Undesign）についてはヒュームが『自然宗教にかんする対話』（*Dialogues Concerning Natural Religion*, 1779）で展開したものが有名だが⁽⁶⁶⁾、いまはアナトール・フランスが小説『神々は渴く』（*Les dieux ont soif*, 1912）でこれを敷衍した箇所から引用しよう。

エピクロスはこういいます。神は悪を阻止しようと欲しているのにそれができないのか、悪を阻止できるのにそれを欲しないのか、悪を阻止できずそうしようとも欲しないのか、あるいは悪を阻止しようと欲しており、かつそれができるのか、そのいずれかであると。神が悪を阻止しようと欲しているのにできないのなら、神は無力です。悪を阻止できるのにそれを欲しないのなら、神は邪悪です。悪を阻止できずそうしようとも欲しないのなら、神は無力にして邪悪です。悪を阻止しようと欲しており、かつそれができるのなら、神父様、神はどうしてそうしないのですか⁽⁶⁷⁾。

ただしエピクロス＝ルクレティウスにとって、神が実在するかどうかはさほど重要な問題ではなかった。この世の悪とみえるものは大半が人間自身に起因しており、自然のなすことに善も悪も本来ありえない。それをあると考えてしまうのは、自然は神が人間の利用に供するために創造したという根ぶかい謬見（宇宙がともかくも人間に観測可能であるのは宇宙が人間に適したものとしてつくられているからだという人間原理（anthropic principle）は、その現代宇宙論版にはかならない）に惑わされているからなのだ。自然がわれわれ人間の

ことなど気にかけてはいない証拠に、宇宙そのものはいつの日かかならず終焉する定めにある。原子同士の偶然的な衝突と結合から生じたものは、いずれ解体し、ふたたび原子に戻る。この離合集散が無限と思えるほどくりかえされるうちに、原子の海は次第に活力を失い、エントロピー最大に達していっさいの波紋が生じなくなる。そのとき宇宙は、もはやかたちあるもののひとつとしてない、時間すら停止する穏やかな死を迎えるだろう。そこにいたるまでも無数のあらたな文明が生まれ、また死んでいくにちがいない——『事物の本性について』は栄華を誇ったアテナイが疫病に見舞われ滅亡する悲惨な描写で全巻の幕をおろす [VI.1138-1286]。

戦後日本文学を代表する作家の武田泰淳は、敗戦から間もない時期のエッセイ「滅亡について」(1948年)でこう述べた。

滅亡は私たちだけの運命ではない。生存するすべてのものにある。世界の国々はかつて滅亡した。世界の人種もかつて滅亡した。これら、多くの国々を滅亡させた国々、多くの人種を滅亡させた人種も、やがては滅亡するであろう。滅亡は決して詠嘆すべき個人的悲惨事ではない。もっと物理的な、もっと世界の空間法則にしたがった正確な事実である。星の運行や、植物の成長と全く同様な、正確きわまりなく、くりかえされる事実にすぎない。世界という、この大きな構成物は、人間の個体が植物や動物の個体たちの生命をうばい、それを噛みくだきのみくだし、消化して自分の栄養を摂るように、ある民族、ある国家を滅亡させては、自分を維持する栄養をとるものである⁽⁶⁸⁾。

武田はそのときをただ座して迎えよといたいのではない。「全的滅亡」を考えることには、自己の死など「より大なるもの、より永きもの、より全体的なるものに思いを致させる作用がふくまれている⁽⁶⁹⁾」というのである。エピクロスの名もルクレティウスの名も出てこないが、これは倫理的なメッセージこゝみの暗黙的な引用といってよい。

古代快樂主義の祖アリストIPPUSは、「法律がすべて廃止されるようなこ

とがあっても、われわれはいまと同じような生きかたをするだろう」と述べたという。エピクロスは、法なき世界においても、またたとえこの世がいつの日か終焉を迎えても、かれらにとっての最高の快楽である心の^{アタラクシア}平静をひたすら追求するだろう。コーマック・マッカーシーのポスト黙示録的小説『ザ・ロード』(*The Road*, 2006)は、「処分のしかたを遺言されないまま残され冷たくなってなお執拗に公転をつづける地球、情け容赦のない闇、太陽の盲目の犬たちが駆けまわる宇宙の破滅的な黒い真空部分、……つかのま猶予された時間とつかのま猶予された世界⁽⁷⁰⁾」にあって、人心が荒廃をきわめるなかでも人間らしさを失わずに生きようとする父親と幼い息子の逃避行を描いている。あらゆるものが未完に終わらざるをえないと知りながら、はかなく過ぎ去る人生の一瞬一瞬を永遠であるかのように生きるかれらもまた、「この日を摘め (*carpe diem*)」(ホラティウス『カルミナ』[1.11])をモットーとするエピクロス主義者なのである。

〔テキストにかんする注記〕

ルクレティウス『事物の本性について』からの引用・引照にあたっては以下のテキストを用い、本文中の〔 〕内に該当する巻数および行数を示す。邦訳は適宜参照したが、前後関係から若干修正した箇所がある。

Titi Lucreti Cari, De rerum natura, ed. Cyril Bailey, 3 Vols. (Oxford: Clarendon Press, 1947). 樋口勝彦訳『物の本質について』(岩波文庫, 1961年)。

注

- (1) ヘルダーは学問詩 (*Lehregedicht*) の創始者ルクレティウスを「そのイメージの炎から察するにローマ最初の天才たちのひとり」と評し、のちに『反ルクレティウス』を書いたポリニャックは「ルクレティウスのなもの、すなわち真の詩的精神を欠いている」と述べた。Johann Gottfried Herder, “Über die neuere deutsche Literatur, Fragmente (1767),” *Frühe Schriften 1764-1772*, hrsg. Ulrich Gaier (Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1985), S.476; II Band 3 Stück (1802), *Adrastea (Auswahl)*, hrsg. Günter Arnold (Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag,

2000), S.231.

- (2) 第1回ノーベル賞文学部門受賞者のジュリ・プリュドムは、「韻文を思想にしたがわせる秘訣」を訳きだすために『事物の本性について』第1巻を仏訳した。Cf. Lucretius, *De la nature des choses, première livre*, traduit en vers et précédé d'une préface par Sully Prudhomme (Paris: Alphonse Lemerre, 1869), p.I. イギリスのモダンニズム詩人バジル・バンティングは1927年に『事物の本性について』第1巻冒頭部分の英訳を試み(“Daring of Gods and Men, beneath gliding Stars”), 後年の代表作『ブリッグフラッツ』(*Briggflatts*, 1966)にそれを昇華させた。Cf. *The Poems of Basil Bunting*, ed. Don Share (London: Faber & Faber, 2021), p.137 and pp.41-61.
- (3) Thomas Hardy, *The Hand of Ethelberta, a Comedy in Chapters* (New York: Henry Holt and Co., 1876).
- (4) 川田順造訳『悲しき熱帯I』(中公クラシックス, 2001年)。
- (5) 佐伯敏郎ほか訳『生物環境物理学——生態学とフラックス』(共立出版, 1975年)。
- (6) Cf. Brian Aldiss, *Helliconia* (London: Gollancz, 2020). 「春」の部は冒頭で328-337行, 末尾で338-347行を, 「冬」の部は冒頭で235-239行と257-260行, 末尾で828-836行をそれぞれ引用している。
- (7) 木原善彦訳『惑う星』(新潮社, 2022年)。qua propter caelum simili ratione fatendumst/ terramque et solem, lunam mare cetera quae sunt/ non esse unica, sed numero magis innumerali [IL.1084-1086] の英訳。
- (8) 池田信雄ほか訳『難破船』(哲学書房, 1989年), 参照。
- (9) Karl Marx, “Hefte zur epikureischen, stoischen und skeptischen Philosophie,” *Karl Marx Friedrich Engels Werke*, Bd.40 (Berlin: Dietz Verlag, 1990), S.171 [大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス初期著作集』(大月書店〈マルクス=エンゲルス全集第40巻〉, 1975年), 126頁]。
- (10) George Santayana, *Three Philosophical Poets: Lucretius, Dante and Goethe* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1922), p.34 and pp.35-36.
- (11) Aldous Huxley, “Subject Matter of Poetry,” *On the Margin: Notes and Essays* (London: Chatto and Windus, 1928), p.33 and 38.
- (12) *Les Essais de Michel de Montaigne*, édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux par Pierre Villey, rééditée sous la direction et avec une préface de Verdun-L. Saulnier (Paris: PUF, 1965), pp.213-14 [原二郎訳『エッセー(1)』(岩波文庫, 1965年), 411-12頁]。
- (13) Cf. Montesquieu, *Œuvres complètes I*, texte présenté et annoté par Roger Caillois (Paris: Gallimard, 1951), p.146 [大岩誠訳『ベルシャ人の手紙(上)』(岩波文庫,

- 1950年), 43頁]; Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes* III, édition publiée sous la direction de B. Gagnebin et M. Raymond (Paris: Gallimard, 1964) [原好男訳『人間不平等起源論』(白水社〈ルソー全集4〉, 1978年)].
- (14) Cf. Merchior de Polignac, *Anti-Lucretius, sive de Deo et Natura* (Paris: Joannem-Baptistam Coignard, 1747), p.19 et 23 [I.471-473; 593-607].
- (15) Christoph Martin Wieland, *Die Natur der Dinge in sechs Büchern* (Halle im Magdeburgischen: Carl Hermann Hemmerde, 1752), S.96 [IV.278-280].
- (16) *Système de la nature, ou Des lois du monde physique et du monde moral* (Amsterdam: Londres, 1770) [高橋安光・鶴野陵訳『自然の体系II』(法政大学出版局, 2001年)].
- (17) Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, *Materialien zu Schellings philosophischen Anfängen*, hrsg. Manfred Frank und Gerhard Kurz, 2. Aufl. (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2016), S.146ff [II.68-72; 172-73].
- (18) 小池澄夫・瀬口昌久『ルクレティウス『事物の本性について』——愉しや、嵐の海に』(岩波書店, 2020年), 参照。
- (19) Erasmus Darwin, *Zoonomia, or The Laws of Organic Life* (Boston: Thomas Andrews, 1809), pp.434-35.
- (20) Cf. Erasmus Darwin, *The Temple of Nature, or The Origin of Society: a Poem with Philosophical Notes* (London: J. Johnson, 1803), Additional Notes, 1-9.
- (21) Henri Bergson, *Œuvres*, t.1, Édition de Jean-Louis Vieillard-Baron en collaboration avec Jérôme Laurent et Alain Panero (Paris: le Livre de poche, 2015), p.99 [花田圭介・加藤精司訳「ルクレティウスの拔翠」, 花田圭介編『小論集I』(白水社〈ベルグソン全集8〉, 2001年), 51頁].
- (22) Robert Frost, “West-Running Brook,” *Complete Poems of Robert Frost 1949* (New York: Henry Holt, 1949), pp.328-29. フロストは「ルクレティウス対湖畔詩人たち」(“Lucretius versus the Lake Poets”)という滑稽詩も書いている。Cf. *ibid.*, p.558.
- (23) Yves Bonnefoy, “DE NATURA RERUM,” *Début et Fin de la Neige, suivi de Là où retombe la flèche* (Paris: Mercure de France, 1991), p.24 [清水茂訳『イヴ・ボスフォワ最新詩集』(書肆青樹社, 2000年), 25頁].
- (24) *Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*, hrsg. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Bd.6 (München: Deutscher Taschenbuch Verlag; Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1980), S.246 [58] [西尾幹二訳『アンチクリスト』(白水社〈ニーチェ全集第II期(4)〉, 1987年), 265頁].
- (25) Nietzsche, *Sämtliche Werke*, Bd.13, S.486 [Frühjahr-Sommer 1888.16.15] [水上英

- 廣訳「遺された断想(1888年初頭-88年夏)」(白水社〈ニーチェ全集第Ⅱ期(11)〉, 1983年), 351頁]。
- (26) Montaigne, *op.cit.*, p.521 [邦訳(3), 154頁]。
- (27) Cf. Patrick Henry, *Montaigne in Dialogue: Censorship and Defensive Writing, Architecture and Friendship, The Self and the Other* (Stanford: ANMA Libri, 1987), chap.1. ミシェル・ビュトール, 松崎芳隆訳『エッセーをめぐるエッセー——モンテーニュ論』(筑摩書房, 1973年), 168-72頁参照。
- (28) *The Works of Francis Bacon*, collected and edited by James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath, Vol.VI (London: Longman and Co., 1861), p.384 [渡辺義雄訳『ベーコン随想集』(岩波文庫, 1983年), 28-29頁]。
- (29) Cf. Hobbes to John Aubrey, 18 [28] August 1679, *The Correspondence*, Vol.2, ed. Noel Malcolm (Oxford: Clarendon Press, 2005), pp.772-73
- (30) Cf. *The New Science of Giambattista Vico*, translated from the Third Edition (1744) by T. G. Bergin and M. H. Fisch (Ithaca: Cornell University Press, 1948), p.64 [I.XL.191] [上村忠男訳『新しい学1』(法政大学出版局, 2007年), 140頁]。
- (31) *Œuvres complètes de Voltaire*, Nouv. éd. avec notices, préfaces, variantes, table analytique, t.28: Mélanges VII (Paris: Garnier Frères, 1879), p.439.
- (32) Voltaire, *Romans et contes*, édition établie par Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel Pomeau (Paris: Gallimard, 1979), p.22 et 618 [植田祐次訳「ミクロメガス——哲学的物語」, 『カンディード他5篇』(岩波文庫, 2005年), 12頁, 池田薫訳「ジェニー物語, あるいは無神論者と賢者」, 『浮世のすがた他6編』(岩波文庫, 1953年), 148頁]。
- (33) Gustave Flaubert, Lettre à Louis Bouilhet, Jérusalem, 20 août 1850, *Correspondence*, t.I, Édition de Jean Bruneau (Paris: Gallimard, 1973), p.664 [蓮実重彦・平井照敏訳『書簡I』(筑摩書房〈フローベール全集(8)〉, 1967年), 176頁]。
- (34) Gustave Flaubert, Lettre à Edma Roger des Genettes, [Sans lieu] 1861, *Correspondence*, t.III, Édition de Jean Bruneau (Paris: Gallimard, 1991), p.191.
- (35) A. E. Housman, *A Shropshire Lad* (London: The Richards Press, 1896), p.47 [XXXII]。
- (36) *Philip Larkin Collected Poems*, Edited and with an Introduction by Anthony Thwaite (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2004), p.190。「理性あるものは/自分が感じないものを恐れはしない」とは、「死はわれわれにとってなにもでもない。なぜなら, 分解したものは感覚をもたず, 感覚をもたないものはわれわれにとってなにもでもないからである」というエピクロスの説を指している。

- (37) Cf. Picus Mirandola ad Melanth, A, *Corpus Reformatorum*, Vol.9, edidit Carolus Gottlieb Bretschneider (Halle: C. A. Schwetschke, 1842), Epistolarum.#6658.A, pp.678-87.
- (38) *Iusti Lipsi Politicorum Sive Civilis Doctrinae Libri Sex: Qui ad Principatum maxime spectant. Additae Notae auctiores, tum & De Una Religione liber* (Antwerp: Moretus, 1599), p.132.
- (39) Montaigne, *op.cit.*, pp.831-33 [邦訳(5), 83-86頁].
- (40) *Ibid.*, p.486 [邦訳(3), 97頁].
- (41) Marquis de Sade, *Œuvres*, t.1, Édition établie par Michel Delon (Paris: Gallimard, 1990), p.506 [原好男訳『アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語』(水声社<サド全集(8)>, 1998年), 155頁].
- (42) *Ibid.*, p.567 [邦訳, 225頁].
- (43) *Ibid.*, p.677 [邦訳, 342頁].
- (44) 「燃えあがる世界の壁」と題した詩は管見のかぎりでは2篇あり、いずれも靈的なものを包み込むそれ自体神秘的な壁の存在をテーマにしている。Cf. Annie Adams Fields, *The Singing Shepherd and Other Poems* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, The Riverside Press, Cambridge, 1895), p.151; Gladys Turquet-Milnes, *Poems* (London: J. Cape, 1928), p.15. その描写が現代のSF小説に活かされた例として James Tiptree Jr., *Up the Walls of the World* (London: Gollancz, 1978), p.38, 110, 140 を参照。
- (45) *Sancti Aurelii Augustini Hipponensis Episcopi Opera Omnia*, editio novissima, emendata et auctior, accurante J. P. Migne: *Patrologiæ Latinæ*, Tomus 42 (Turnhour: Brepolis, 1987), IV.proem.1 [泉治典訳『三位一体』(教文館<アウグスティヌス著作集28>, 2004年), 125頁].
- (46) *Opera omnia Ioannis Pici Mirandulæ* (Basileæ: Heinrich Petri, 1557), 339, II.1-4.
- (47) John Henry Cardinal Newman, *The Idea of a University, Defined and Illustrated*, sixth edition (London: Longmans, Green and Co., 1886), p.432 [II.7.3].
- (48) 杉山洋子訳『妖精物語の国へ』(ちくま文庫, 2003年), 120-1頁。
- (49) Thornton Wilder, *The Eighth Day, Theophilus North, Autobiographical Writings* (New York: The Library of America, 2011), p.371 [宇野利泰訳『第八の日に』(早川書房, 1977年), 453頁]. 他方でワイルダーの『三月十五日』(*The Ides of March*, 1948) に登場するカエサルは、ルクレティウスのエピクロス主義を奉じて迷信や予言を信じない犀利な合理主義の人間として描かれている。Cf. Thornton Wilder,

- The Bridge of San Luis Rey and Other Novels 1926-1948* (New York: The Library of America, 2009), pp.443-45 [志内一興訳『三月十五日——カエサルの最期』(みすず書房, 2018年), 69-73頁].
- (50) *Sphaera Georgii Buchanani Scoti poetarum nostri seculi facile principis: Quinque libris descripta* (Herbornæ: Corvinus, 1586), p.2 [I.11-13].
- (51) *The Complete Poems of John Wilmot, Earl of Rochester*, ed. David M. Vieth (New Haven and London: Yale University Press, 1968), p.96 [66-71].
- (52) *Ibid.*, p.97 [76-79].
- (53) *An Essay on the First Book of T. Lucretius Carus De rerum natura*, Interpreted and made English verse by J. Evelyn Esq. (London: Gabriel Bedle and Thomas Collins, 1656), p.18. エピクロス = ルクレティウスの用語系では、「世界」に限界はあっても「宇宙」は無限である。ロチェスター没後に『事物の本性について』を英語で最初に完訳したトマス・クリーチは“The flaming limits of the World”と正しく訳している。Thomas Creech, *T. Lucretius Carus the Epicurean philosopher his six books De natura rerum done into English verse, with notes* (Oxford: L. Lichfield, 1682), p.4.
- (54) Paul Henri Thiry d’Holbach, *Système de la nature, ou Des lois du monde physique et du monde moral*, t.1, Nouv. éd., avec des notes et des corrections par Diderot, Édité avec une introduction par Yvon Belaval (Hildesheim: G. Olms, 1966), pp.1-2 [高橋安光・鶴野陵訳『自然の体系 I』(法政大学出版局, 1999年), 25頁].
- (55) Julien Offray de La Mettrie, *Œuvres philosophiques* (Hildesheim: G. Olms, 1970), p.279 [杉捷夫訳『人間機械論』(岩波文庫, 1932年), 44頁].
- (56) Lettres à Falconet IV, Février 1766, *Œuvres complètes de Diderot*, t.XVIII, revues sur les éditions originales, comprenant ce qui a été publié à diverses époques et les manuscrits inédits conservés à la Bibliothèque de L’Ermitage, notices, notes, table analytique, étude sur Diderot par J. Assézat et M. Tourneux (Paris: Garnier Frères, 1876), p.115.
- (57) *The Writings of Henry David Thoreau: Journal VIII, November 1, 1855-August 15, 1856*, ed. Bradford Torrey (Boston and New York: Houghton Mifflin and Co., 1906), p.312.
- (58) Robinson Jeffers, *The Beginning and the End and Other Poems* (New York: Random House, 1963), p.6. ジェファーズはアメリカの詩人。非人間中心主義(inhumanism)を唱えてエコロジー思想にも多大な影響をあたえた。
- (59) Allen Mandelbaum, *Chelmaxioms: The Maxims, Axioms, Maxioms of Chelm* (Boston:

- David R. Godine Pub., 1978), p.97. マンデルボームは『アエネーイス』や『神曲』の英訳者としても知られ、作家ポール・オースターの叔父にあたる。
- (60) この「世界の壁」をモチーフにした現代のSF作品として以下を参照。Ursula K. Le Guin, "Paradises Lost," *The Birthday of the Earth and Other Stories* (New York: Harper Perennial, 2003), p.260, 334, pp.336-37 [小尾美佐訳『世界の誕生日』（ハヤカワ文庫, 2015年), 433, 547, 551頁].
- (61) Walter Pater, *Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas* (London: Macmillan, 1885), p.136 and 139 [工藤好美訳『享楽主義者マリウス』（筑摩書房〈ウォルター・ペイター全集(3)〉, 2008年), 92, 94頁].
- (62) Cf. Joseph Conrad, *Chance: A Tale in Two Parts* (New York: Doubleday, Page and Co., 1914), p.66. ただしコンラッド自身はデモクリトスの徹底した決定論ないし宿命論の信奉者である。
- (63) Cf. *Sir Walter Scott on Novelists and Fiction*, ed. Ioan Williams (London: Routledge and Kegan Paul, 1968), p.348.
- (64) Cf. Nietzsche, *Sämtliche Werke*, Bd.4, S.35f und 100 [蘭田宗人訳『ツァラトゥストラ』（白水社〈ニーチェ全集第Ⅱ期(1)〉, 1982年), 46-50, 115頁].
- (65) Cf. *The Philosophical Works of David Hume*, Vol.2, eds. T. H. Green and T. H. Grose (Aalen: Scientia, 1964), p.440 [福鎌忠恕・斎藤繁雄訳『自然宗教に関する対話』（法政大学出版局, 1975年), 116頁].
- (66) *Œuvres complètes illustrées de Anatole France*, t.XX (Paris: Calmann-Lévy, 1931), p.185 [大塚幸男訳『神々は渴く』（岩波文庫, 1977年), 209頁].
- (67) 早乙女忠・中村邦生訳『喜びのおとずれ——C・S・ルイス自叙伝』（富山房百科文庫, 1977年), 84頁。
- (68) 川西政明編『評論集・滅亡について』（岩波文庫, 1992年), 22頁。
- (69) 同書, 28-29頁。
- (70) Cormac McCarthy, *The Road* (New York: Vintage Books, 2007), p.130 [黒原敏行訳『ザ・ロード』（ハヤカワ epi 文庫, 2010年), 149-50頁].